

2020年9月1日 脱稿 (ドラフト)

戦後日本のムスリム・コミュニティの発展 ―今後の東京ジャーミイの役割―

早稲田大学 店田廣文

東京ジャーミイは、国内 105 箇所を超えるイスラム礼拝所（モスク＝マスジド）の中で唯一のトルコ・オスマン朝風のイスラム建築であり、井の頭通りに鉛筆型のミナレットと鉛板で葺かれたドームが聳える雄姿は、代々木上原の街の日常的な光景のひとつとなっている。東京ジャーミイのこれからを語る前に、戦後における日本のムスリム・コミュニティの発展と課題を、ムスリム人口の増加や礼拝所の開設状況をたどった上で述べておこう。

<日本におけるムスリム人口の現状>

東京ジャーミイの前身である「東京回教礼拝堂」は、1938年（昭和13年）に開設された。その頃の国内のムスリムは、主にタタール人移民を中心として700人前後であったが、第2次世界大戦後に、その様相は大きく変化した。1953年にタタール人移民に対して、トルコ国籍が付与され、多くの人々がトルコや米国などに移住していったのである。戦後日本のムスリム・コミュニティは、トルコ国籍を取得したが日本に残留したタタール人移民と、戦前・戦中に入信した日本人ムスリムからなる小さなコミュニティとして、再出発した。

ムスリム人口の推移をみると、1950年代以降の日本の国際社会への復帰と高度経済成長にともなって、イスラム圏への日本人留学生の改宗や、仕事や留学を目的とする外国人ムスリムの来日などにより徐々に人口が増加した。外国人と日本人を含めた国内のムスリム人口は、1960年代末には約3千5百、1980年代半ばには、約8千まで増加した。その後、1980年代末頃からのバブル経済期には、10万を超える外国籍のムスリム労働者が来住し、一時的にムスリム人口が急増したものの、1990年代半ば頃には3～4万程度に落ち着いた。2000年代にかけても、外国人ムスリムの流入が続き、日本人の配偶者等や永住者などの在留資格を得た定住化が進行した。国際結婚によってムスリムとなる日本人や第2世代のムスリムも増加して、日本のムスリム人口は、2010年に11万、2016年に13万、2018年には20万とその存在感を高めてきた。

2019年末現在、日本のムスリム人口は、23万である。内訳は、外国籍のムスリム人口が、18万3千。加えて、日本国籍のムスリム人口は、国際結婚のため改宗したムスリムが1万4千、その家族から誕生した子どもや若者のムスリムが2万8千、帰化したムスリム（日本国籍を取得した外国籍ムスリムで子ども・若者を含む）が3千、自ら入信したムスリム（子ども・若者を含む）が2千、以上合わせて、4万7千である。2010年の日本のムスリム人口は、11万であったから、9年間で、その数は倍増したことになる。

<国内におけるモスクの布置状況>

1945年の終戦直後に、国内に存在したモスクは、神戸モスクと東京ジャーミイの前身である東京モスク（東京回教礼拝堂）の2箇所であった。戦後しばらく、東京モスクは、東日本で唯一の大規模礼拝所として機能し、最盛期の集団礼拝には、800人前後のムスリムが集って礼拝堂からはみ出すほどであったが、1983年に老朽化のために閉鎖された。

モスクを巡る状況は、1991年に埼玉県春日部市に一ノ割モスクが開設されたことを契機に、大きく変化した。1980年代末頃からの外国人ムスリムの急増が主な要因であり、かれらの喜捨による資金拠出や建設運動によって、1990年代末までに、関東に8箇所、愛知県、富山県に各1箇所のモスクが開設された。その後、中古車輸出業やハラール産業などの自営業者として経済的成功を収めたムスリムが増加し、開設資金の確保が容易になったこと、国内外の喜捨ルートの多様化による資金確保などもあって、2000年代に入ると、モスクは建設ラッシュを迎えた。

東京ジャーミイが開設された2000年には、10数年前と比べ、日本のムスリム・コミュニティの風景は大きく変貌していた。ムスリム人口は5万を超え、国内各地に20箇所近いモスクが開設されており、東京ジャーミイは、それらモスクの一つとして活動を再開したのである。その後も、ムスリム人口の増加やムスリム居住地域の全国的な拡大もあって、2019年末現在で、北海道から沖縄県まで105箇所を超えるモスクが開設されている。

<ムスリムの社会的活動の発展とムスリム・コミュニティの課題>

モスクは、第一義的には礼拝のためにムスリムが集う場であるが、同時に各地域のムスリム・コミュニティの中心としての機能も果たしている。モスクは、宗教的実践の場であるだけでなく、ムスリムにとっての精神的な拠り所、憩いの場、生活相談や情報交換の場、相互扶助の場、子どもや成人のための宗教教育の場、祭りや入信・婚姻・葬儀の場など多様な機能を有している。また、土葬可能な墓地建設、ハラール食品の確保、イスラム学校の建設、イスラムの文化や価値の継承など、非ムスリム社会において、ムスリムの生活全般を支え、ムスリム・アイデンティティを強化する活動の主な拠点となっているのがモスクである。さらに、日本社会や地域社会・地域住民との共生を図る活動なども実施されている。

ムスリム・コミュニティの発展にともなって、モスクの活動はその質や量を高めてきたが、ニューカマー・ムスリムによる最初のモスク建設から既に30年近くが経過しており、ムスリム移民の第一世代も高齢化しつつある。かれらが中心となって、築き上げてきたムスリム・コミュニティの持続性を担保することが、ムスリムにとって現時点での重要な課題となっている。具体的には、第一に、モスクをはじめとする宗教施設等の維持管理と物理的な継承、第二に、将来のムスリム・コミュニティを担っていく第2世代の育成と人的継承、第三には、ムスリム・コミュニティと日本社会との共生、という3つの課題がある。

<ムスリム・コミュニティと今後の東京ジャーミイの役割>

東京ジャーミイで行われる金曜日やイード（祭り）の集団礼拝には、極めて多様な国籍・

エスニシティをもった老若男女のムスリムが集まる。都内に限らず、関東一円からムスリムが集まるし、来日したムスリム観光客もやってくる。礼拝の収容人数は2000人であり、集団礼拝の光景は壮観である。国境や国籍・民族そして世代・性別などを超越した場が、東京ジャーミイである。

東京ジャーミイのウェブサイトによると、公開文化講座、チャリティバザー、ヤングムスリム倶楽部のイベント、アラビア語やアラビア語書道などの文化講座やクルアーンに関するイスラム講座、女性のためのヒジャーブの会、若い母親の会（アンネの会）、またお花のワークショップといった趣味講座に該当するものから、毎週土曜・日曜に実施されている非ムスリムのための「東京ジャーミイ・ツアー」まで多種多様な活動が実施されている。また、ウェブサイトには紹介されていないが、近隣の高校へのイスラム出前講義の実施も特筆できる活動であろう。他のモスクと同様に、憩いの場、生活相談や情報交換の場、相互扶助の場、入信・婚姻・葬儀の場など多様な機能を果たしている様子もうかがわれる。これら諸活動を見ると、ムスリム向けの活動と、非ムスリム向けの活動が万遍なく実施されており、ムスリム・アイデンティティの維持強化に資する活動もあれば、非ムスリムとの共生やイスラム理解を視野に入れた活動のみならず、イスラム文化や中東・トルコなど広く異文化への関心や興味を持つ人々への活動も実施されている。ハラール・マーケットもあって、併設のトルコ文化センターでは、語学講座をはじめとする各種講座、映画や美術展示、図書室やカフェがあるのも特徴である。以上のように、ムスリム、非ムスリム、イスラムに関心を抱く人、そうでない人、異文化に関心を持つ人、女性や第2世代などなど、ある意味で誰もが自分の活動の「場」を発見できる空間が、東京ジャーミイである。さらにイベントや活動に関心が無く、「インスタ映え」を求めてやってくる若者も排除しない。

このような広範な活動の現状を見ると、今後の東京ジャーミイの役割として指摘すべきことがあるのかと疑問を抱いてしまう。これまで東京ジャーミイとそのスタッフや関係者が企画し実現させてきた諸活動や施設の運営を続け、繰り返しになるが、「ある意味で誰もが自分の活動の「場」を発見できる空間」を提供していくこと、そして運営の過程で、新たな発想や変革を交えて、活動をさらに豊かに展開していくことが、今後の東京ジャーミイの役割とも思えるのである。大きな「包容力」を持つ空間をこれからも期待したい。

とはいえ、ここでは編集者からの依頼にそって、ムスリム・コミュニティの発展と課題をふまえ、東京ジャーミイの今後の役割について私見を述べさせていただきたい。当然のことと思われるが、日本のムスリム人口には、日本人ムスリムが多数存在することに留意してほしい。日本のイスラムの将来を考えると、日本人ムスリムへの広義のイスラム教育は重要であろう。日本語でのイスラム教育を求める声は以前からあり、近年は、日本人のイスラム法学者も増えつつあるが、まだ十分ではない。外国人ムスリムと日本人ムスリムのリーダーたちが協力して、成人・男女や子ども・若者世代を問わず、日本人ムスリムへのイスラム教育の体制を整えることが求められよう。イスラムとの向き合い方は、ムスリムひとり一人に委ねられており、イスラムの教えの受容は、人それぞれであって良いのだろう。しかし、日本

社会での共生をめざし日本人住民へのイスラム理解の促進を唱えるのであれば、改宗者（女性が多い）がそれなりの数を占める日本人ムスリムのイスラム教育にも取り組むことが必要であろう。トルコ共和国宗務庁の協力も得られる東京ジャーミイは、有力なアクターのひとつである。特に、日本人のなかでも、いわゆる第2世代に相当する子ども・若者世代が急増しており、2万人を超えている。将来の日本のイスラムを担う第2世代へのイスラム教育や、ムスリム・アイデンティティの形成を視野に入れた活動に更に注力していただきたい。

もう一点、ムスリムの高齢者への対応を挙げておきたい。定住しているムスリムも50代以上の人が増加しつつある。高齢化は、ケアや終活などに関わる需要を生み出す。国内では6箇所にすぎないイスラム霊園の不足への対応も必要と思われるが、老人ホームや病院など福祉・医療施設の運営や建設も構想されて良い。早稲田大学主催の「モスク代表者会議」で数年以上前に議論されたように記憶するが、施設の建設や運営に「日本版ワクフ（財産寄進制度）」の構想が上がったこともあるので、これも改めて検討してみてもどうだろうか。

<日本社会との共生>

日本社会や地域住民との共生やイスラム理解促進の活動は、多くのモスクが抱える課題である。イスラムに限らず異文化や異質なものに対する無知や無理解は、偏見や恐怖を生みかねない。日本人住民には、イスラムやムスリムに対して、ネガティブな意識を持つ人が多く、ムスリムと友人関係や交流がある人は僅かであろう。ある意味で些細なことがきっかけでムスリムやモスクに対する苦情やトラブルが生ずる。これまで見てきたように多彩な活動が行われ、誰もが気軽に訪れて、地域と良好な関係が築かれているように見える東京ジャーミイも、決して例外では無い。とりわけ、集団礼拝の時は注意が必要であるというのが各地のモスク関係者の言である。周辺道路や一般駐車場での駐停車を巡るトラブル、路上での喫煙や周辺の歩道での混雑や騒音への苦情が近隣から寄せられるという。「地域社会を大切にすることは宗教的義務である」とイスラムの教えにも言われ、モスクによっては積極的に地域行事への参加や地域住民との交流を試みるところもある。東京ジャーミイでも、毎週土曜・日曜に実施している「東京ジャーミイ・ツアー」によるイスラム理解促進のための活動に加えて、地域の町内会長との連絡や各種イベントや講座、イフタール（断食明けの食事）への招待、「見学はご自由です」という垂れ幕を掲げ、モスク開放を強調するなど、さまざまな試みを行っているが、トラブルや苦情は、頭痛の種であるという。

以上に掲げてきた提言・構想や共生・理解促進の活動が、ムスリム・コミュニティの中で共有されることによって、実現可能性や改善の方策が見えてくることもあろう。しかし、国内にあるモスク同士のネットワークや繋がりはまだ弱く、社会的活動の情報共有や連携は進んでいないと思われる。東京ジャーミイは、これまでモスク間の交流に積極的であったとは言いがたいが、現在のイマームは各地のモスクを訪問する試みを始めたと聞く。各地に日本社会との交流経験や活動実績があるモスクや団体が存在しており、東京ジャーミイが率先して、ネットワークを形成する試みがあっても良いと思われる。東京ジャーミイが持っている

る活動資源やこれまでの実績は、豊富で充実しており、活動一つとってみても、他のモスクが簡単に模倣できるものではないが、多くの有益なヒントを他のモスクや団体に与えてくれるものである。日本社会に開かれた外向的な活動を特徴とする東京ジャーミイが寄与できるところは大きい。一方で、他のモスクや団体から学ぶべき構想や活動事例もあるだろう。多文化共生施策を実施する地方自治体との協働も図りながら、モスク相互の協力・協働関係が出来れば、日本社会との共生に関する取り組みも良い方向に変化するであろう。

目覚ましい発展をとげつつある日本のムスリム・コミュニティの中で、今後の東京ジャーミイの社会的活動の展開を期待してやまない。